

善門地蔵

関屋弘治

小さな村

まだ戦争の傷あとが所々に残る山間に、小さな村がありました。

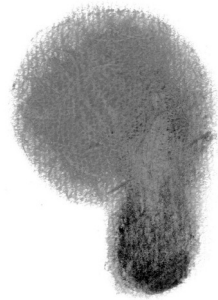
村は、坂道と石垣でつくられた丘の中ほどに、せまい畑と家がいくつもある集落でなっていました。坂道を登った上のほうを坂の上、下のほうを坂の下と呼ばれる三十戸位の村でした。

そして、いちばん低い所は、ちよつとした平地で、平地と丘の境に数本の古木が茂る林があり、その林の中に半ば朽ち果てた神社の社がありました。社の裏手には、周りの風景とは似つかない、大きな丸い石が三個あり、その下から水がこんこんと湧き出ていて、小さな池をつくり、そ

こから流れる小川は、平地の田んぼをうねって流れていました。小さな池は、タンコビラと呼ばれ、社前の広場とタンコビラは村の子供たちの毎日の学校帰りの遊び場となっていました。

今日も村の子供たちは社前の広場に集まり、鬼遊びをしていました。鬼遊びとは、鬼になった数人が、頭にむぎわらと草を束ねた「髪の毛」をかぶり、他の子供たちを棒のやりで追いまわし、棒で刺された子は社の楠の木に繋がれて、バツを受ける遊びです。

小学校の仲良し同級生のひろしとケン坊は、鬼から隠れるため、今日は薄暗い社の中へ入りましたが、鬼になった子が「ウオオー」とうなり声をあげながら格子戸のほうへ近寄って来たので、二人は急いで社のお堂の奥へかけこみました。



その時、ひろしの足が、何か奇妙な柔らかい物を踏みつけました。びっくりして振り返ると、黒いものが、むつくと起き上がり、「オイ、オイ」と声を出しました。

ひろしもケン坊も子供たちも驚いて社の外に逃げだしました。黒いものは、ギシーギシーと床を鳴らしながら、お堂の入り口に現れました。

それは男で、ボロボロの服をまとい、肩から足まで毛布をかぶり、髪はボサボサで長く、靴とも、ぞうりともつかない履物をはき、毛布のすそをぞろびきながら、じろーつと子供たちを見たあと、社の奥に消えました。

それから、社とタンコビラの近くで、時々その男を見かけるようになりました。

ひろしが、おとうにこの男のことを話すと、「ああー、あのゼンモンか……、まあ悪さはせんが……。お前らのほうが悪さしたらいかんぞ」と言いました。

ゼンモンとは、乞食、浮浪者などをさし、今で言うホームレスのことを、この辺ではそう呼んでいました。禪者か膳者からきた言葉かもしれませぬ。

タンコビラ

その日、ひろしとケン坊の学校は、ちやうど家庭訪問の

時期で、その日は半ドンでした。

昼から二人は、例のタンコビラでドンコや小鮒とりをして遊んでいました。

その時、ケン坊が小川の土手から頭を出している赤茶色の妙なものを見つけ、引つ張り出しました。それは、六角形で長さが三〇センチ位の錆びた金属の筒状のものでした。

「なんじゃー、こりゃあ」

「中になんか入っとるかもしれんぞ」

「洗えばきれいになるかもな……」

ケン坊が小川の水で洗い始めた時、頭の上のほうから、「そりゃあいかん、オイによこせ！」と声がありました。いつのまにか、あのゼンモンが土手の上から二人を見ているのです。

「あつ、ゼンモンだ」

「ゼンモンに渡すな、盗られるぞ」

「ゼンモン……、オイのことか？ ゼンモン……ゼンモン……善門、善門……、うん、良い名前だ。そりゃあ、どうでもいいから早くそれをオイに渡せ！」

「せっかく拾ったんに、ゼンモンに盗られるもんか」
ケン坊が少し錆がひどい所を洗っていると、中から白いドロドロしたものが流れ出てきました。

「なんじゃ、気色悪い。中には何にも入っとらんぞ」

ケン坊は、六角の筒を小川の下のほうに投げ捨てました。「あれは危ないからのう、手にしたらいけんぞ」

ゼンモンは、そう言っただけで社の方に歩いていきました。

そんなことがあって何日かたった、ある日のことでした。学校の朝礼で、教頭先生が朝礼台の上であの六角の筒を頭の上にかざして、大声で言っていました。

「これは焼夷バクダンだ！　きのう本校の生徒が、裏山で拾っていじっていた時に爆発した。大怪我だ！　これを見つけても絶対触らず、必ず大人のひとか先生に知らせること。わかりましたか！」

ひろしとケン坊は、びっくりして顔を見合わせました。

ひろしとケン坊は、学校の帰りにあの男に会って、「この前はゴメン」と言いました。

男はうなずいただけで何にも言いませんでしたが、この時、初めて善門の顔を正面から見ました。なりは汚いけど背は高く、大きな澄んだ綺麗な目をしていました。

それからは、気味が悪かった善門に、なんとなく親しみを覚えだしていました。

ツガニとり

ある秋口の天気が良い日、善門は、タンコビラの下流の土手の上に片足をあげ、もう一方の足は水の中に膝をつき、土手の下に手を入れて、うずくまっていました。

「善門さん、何しとんの……」

「シイー、静かに……」

ひろしとケン坊が、じーっと見ていると、善門は、右手に持った草の茎を土手の下のくぼみの中にそーっと差し込んで、抜きながら何かを探っているようでした。

しばらくすると、くぼみの穴の中からカニの足が一本、ニョキッと現れてくるではありませんか。さらにカニは、草の先についた物を追いかけて、用心深く、ゆっくり回りを窺うように、少しずつ少しずつ穴の外に姿を半分ほど見せてきました。そしてカニが、ハサミの毛をユサユサ水にゆらせながら、草の先っぽの白いものをハサミでつかんだ瞬間、善門の左手が、バシヤッと水音をたててカニの甲羅を掴んでいました。

つかまえたカニは、ひろしの手の平の三倍もあろうかという、大物のツガニ（モズクガニ）でした。

善門は、ひろしのほうを見て、にやっと笑いながら、近

くのカエルをひよいと捕まえ皮をびりびり剥いで、草の茎の先つちよに結びました。草の茎の先のはカエルだったのです。そしてまた、別の穴を探り始めました。

ツガニが三匹とれたところで、善門が言いました。

「しじみ汁もいいな。よし、しじみ釣りするか」

「しじみは、釣るじゃなくて、すくうんだろ」

「見てろ、その松の木の松葉を五、六本取ってきてくれや」

善門は、ケン坊の松葉の一本をつまんで、そこらの川底を見て回り、小川の水がよどんだ一角に座り込みました。

そして松葉をそーっと川底に差し込んで引き上げると、松葉の先になんと大きなしじみがくっついていてはありませんか。

「な、解ったか。ほら、見ろ、しじみは川底の土に潜っていても、口だけは水に出して息をしてるのさ。その口に松葉を差し込むと、しじみはびっくりしてからを閉じ、ほら、このとおりさ。すくうより風流で面白いだろ」

川底をよく見ると、たしかに、しじみの口らしきものが、あちこちに、小さなめがねのように二個ずつ、パクパクと開いては閉じ、息をしていました。そこに松葉を差し込んで引き抜くと、ちゃんとしじみが釣れるのです。この遊びは、その後、学校の仲間の間でずいぶんはやったものです。

善門は川からあがり、ツガニを食おうと二人を誘いました。

どこかで拾った金属製の洗面器に川の水を入れて、ツガニをほおりこみ、木のふたと石の重しを載せて、火の上に置きました。ツガニはしばらくガガゴソと洗面器の中で音をたてていましたが、やがて静かになり、なんともいい匂いがしてきました。

においといえ、先ほどより、善門の体からは異様なにおいがしていました。先ほど川に入った時に、ずぼんや袖が水に濡れていましたが、火のそばで、においを出しながら乾きかけているのです。

ひろしは思い切つて言いました。

「善門さん、臭いよ」

「なあに、すぐ慣れるさ。嗅覚というものはな、すぐ慣れてマヒするもんさ」

「お風呂には入っとるの？」

「オイの風呂は、そのタンコビラさ。足は時々洗うけど、体を拭くのは月一、二へんかな。風呂は健康に良くない。人間の毛穴は、適当に脂あかで塞いでいないといけないのよ。そうすると汗も出んし、カゼもひかんのさ。頭がかゆい時はな、風が強い日に風に向かって両手で頭を、ガリガリかくのさ。スギの花粉が散るようにフケが風に飛んで、

なんともすつきりするもんさ。あははは……」

ひろしは、なんとなく納得しました。ひろしが大人になった今も風呂嫌いなのは、この時のことが影響しているのかもしれない。

二人はツガニを一匹ずつもらって、ツメをチュウチュウしゃぶっていた時、一人のおばあさんが、竹の皮にくるんだおにぎりを善門に持つてきました。

その人は、坂の下にただ一軒ある駄菓子屋の、オトキばあさんでした。

善門は立ち上がり、おにぎりをもらうと、オトキばあさんが見えなくなるまで頭を下げていました。善門もおばあさんも無表情で、一言も物を言いませんでした。

そう言えば、善門が村の大人と話をしているのを見たことは、一度もありません。

オトキばあさんは時々おにぎりを持つてくるらしく、社の奥にその竹の皮が、何枚も大事にしまっていました。

進駐軍

真夏の暑い日でした。

坂の下から坂の上に通じる村の一本道を、一台のジープが砂ぼこりをあげて走って来ました。ジープには、二人の

アメリカ兵と、口紅を真っ赤につけた二人の日本の女が乗っていました。タンコビラの近くでジープは止まり、小川のほうを指差し何かしゃべりながら、ドライブを楽しんでいる様子です。

村の子供たちや、ひろしやケン坊は、ジープのそばに駆け寄り、口々にチョコレートをせがみました。

「ギブミー、チョコレート」

「ギブミー、チュウインガム」

「パンパンのお姉ちゃんよう、チョコレートくれよ」

「パンパンって言うじゃないよ、可愛げがないんだから、このクソガキ……!」

それでも幾つかのチョコレートやガムを、子供たちはせしめることができました。

その時、善門がアメリカ兵に近寄り、何かを話しました。善門が話しているのは、流暢な英語でした。ジープの座席に置いてあった新聞をねだったらしく、その新聞を手にして、「サンキュウ」って言って歩き出したあと、あわてて振り向き「サー」と大声で付け足しました。

子供たちは、小川の水に足をつけてバシャバシャさせながら、チョコレートをなめていました。タンコビラの水に足をつけると、体から汗がひくのです。

善門も、水に足をピチャピチャさせながら、英語の新聞

を見ていました。

「善門さんは英語が読めるのか？　すごいなあ、校長先生でも英語はだめだーって言ううとったのに……」

「へっへっへっ……、字がいくつ書いてあるか数えてくれるだけさ」

それでも善門は、真剣な顔をして三十分位、英字新聞をめぐっていました。そして新聞を手にして、やおら立ち上がると、近くの草むらの中に入ってしゃがみこみ、草の上に首だけ出して子供たちを眺め始めました。

「善門さん、何しとんの？」

「こつちを見るな、クソしとるんじゃ」

しばらくして、くしゃくしゃに丸めた英字新聞を手にした善門は、草むらから出て来て、「魚のエサだー」と言いながら、川下のほうに投げ捨てました。その時、「ざまあみろ……」と、たしかに善門が言ったように聞こえました。

善門の素性

ここで、何とも奇妙な善門の素性について書いておきましょう。

戦争が終わって何年かたった頃、二十代半ばの男がふらりとこの村に現れて、社に住み着きました。一見して

兵隊あがりで引揚げ者風のかっこうをしていましたが、そのうち、髪は伸ばしっぱなしで着ている物もボロボロになり、村人の一人から貰った進駐軍払い下げの灰色の大きな毛布を肩からかぶり、靴は、かかとがはずれ足の指も出ていて、かろうじて靴底と上部がくっついていっているもので、ゾロゾロペタン、ゾロゾロペタンと音をたてながら歩くのでした。腰には、よれよれの幅広革ベルトに大きなバックルが付いたものを締めていました。ベルトには、水筒、アルミ製の弁当箱と鍋代わりの洗面器、それに革の鞆に入った海軍ナイフをぶら下げており、これがまた歩くたびに、ガシャチン　ガシャチンと音がするのです。

村人も最初は気味悪がり、駐在さん（おまわりさん）に相談することになりました。

駐在さんの調査では、南方帰りの船で浦ノ崎港に降り立った元兵隊であり、南方での激しい戦闘のことはよく覚えているが、自分の名前も部隊も故郷も記憶がなく、ふしぎなことに身元が判る物は、なあんにも持っていないということでした。

男の性格は、おとなしく無口で、村人や子供に危害をくわえる様子はないけど、村人が近寄ると逃げるように歩き出し、男と話したことがある者は誰もいませんでした。後にひろしやケン坊たちが男と話しているのを見て、男が物

が言えるということをはじめて知った村人もいたのです。そんな時、駄菓子屋のオトキはあさんの「お国のために戦った若者じゃ、かわいそうじゃがね」との一言に、村人も納得し、村から追い出されることもなく、男はひっそりと社に住み着いたのです。オトキはあさんの一人息子も戦地に行ったり、いまだに行方不明なので、その一言は村人にも重かったのです。

そういうわけで、川でツガニやウナギや小魚を取ったり、山でマテやドングリやアケビを取ったり、タンコビラで海軍ナイフでひげを剃ったりする姿が、よく見られるようになったのです。

そう言えば、髪はボウボウなのに、なぜかひげだけはよく剃っていて、いつも顎だけが青々としているのが、アンバランスな不思議な男でした。

タンコビラのおお丸石と洞窟

善門が子供たちに不思議な話やおかしな話をするので、遊びに飽きた子供たちは、社に来ては、何か面白い話はないかと、よくせがんでいました。

そして善門が今日は、タンコビラのおお丸石とそばの洞窟について話を始めました。

「あのおお丸石はなあ、どうしても合点がいかん。触ってみるよ、日が照っていない日もいつも生あつい。付近にあんな大石はどこにもないし……。あの三つの大石は、きつと宇宙から降ってきたんに違いない。石の芯には、放射能が入ったかもしれないぞ。もしも放射能が入ったたら、あの石に登ったらいかん。登ったら寝シオン便するぞ。」

そうだ、あの石が宇宙から落ちてきたもんなら、この近くにかぐや姫も一緒に落ちてきたかもしれないぞ。お前ら、夜光る孟宗竹を見たことないか？」

とつびょうしもない話に、子供たちは大喜びです。

「かぐや姫なんて、おとぎ話じゃなか。それにかぐや姫は、赤ちゃんの時から竹の中に入っていたのさ」

「ちがうんだな……」

善門は、自信たっぷりに眼をギョロリと皆を見回し、話を続けました。

「あの赤ちゃんはな、実は未来の国の赤ちゃんなんだよ。ある時、未来の国に新型の宇宙菌がまん延して、大人たちがバタバタ死んで行ったのさ。赤ちゃんだけは助けようとタイムカプセルに入れて、ちがう時代に避難させたが、タイムカプセルの操作をまちがった何人かの赤ちゃんが、その時の時代の竹の中に落ちてきたのさ」

子供たちは、「うっそだあー」と囁し立てたので、善門は

苦笑いして頭をボリボリかきながら、話を洞窟にかえしました。

「ほら、あその洞窟よ、みんな何にも感じないか？ オイには、どうもいわくあり気で、何か靈気を感じるのよなあ」

「そうだよ、あそこは、昔ね、鬼がすみついていて、いまま何か出てくるかもしれないから、近寄つたらいけないって、うちのジイが言っていたよ」

「鬼かあ、鬼ちゅうのはな、本当は大昔の異人さんのさ。大昔のまた大昔、ペルシヤ人とカインド人が、しげにあつて船が難破するたびに、日本のあつちこつちに流れ着いたんじや。ところが日本の村人とは、言葉は通じんし、習慣も文化もちがう。体もでかいし毛むくじゃらで、皮膚の色も赤かったり黒かったり青かったりで目の色も違う。鬼の角はバイキングの兜さ。」

結局村人とは仲良くなれず、村から遠く離れた山の洞窟や、離れ小島に住み着くしかなかったのさ。そいつらの中には、時々村に現れては、食べ物や奪つたり村娘をさらつたりする者もいて、たいそう人々に恐れられた。いつの時からか、そいつらを鬼と呼ぶようになったのさ。

でもな、中には人の良い鬼もいてな、便利な道具や皆が知らない薬を村人に教えて、ありがたがられた鬼もいたそ

うな。だからな、今は鬼なんていないのさ」

「へええー、善門さんは何でも知つとるとじやなあ」

「へへへ……、しかし、あの洞窟は、鬼の気とは違う何か……何かを感じるのよなあ」

ひろしは、おお丸石のことに興味を持ち、大石の上に登つてみました。たしかに不気味な暖かさがありました。

その夜、ひろしは、タイムカプセルの中で小便を我慢する夢を見ました。朝になり、「小学生もなつて寝ション便するなんて！」と、おかあにひどく叱られました。

そしてケン坊は、あの洞窟のことが、それからずーっと気になつて仕方ありませんでした。

それから何年もたつてから、ケン坊はあの洞窟から石器人の人骨を発見して大ニュースとなり、一躍有名人になるのです。

屁の話

その頃、村では戦争以来、何年も途絶えていた村祭りやおくんちの再開の話が出ていました。

「この村にも、そろそろ祭りが欲しいのう」

「そうそう、ワシらの子供の頃の祭りは盛大じゃつたのう。夜店もぎょうさん出よつた。ワシやあ、祭り相撲では

一番強かった」

「そうよ、あの頃は祭りが村一番の行事で、老人会も青年団も子供会も活気があったのう」

「うんうん、わたしや盆おどりで一番目立ってのう、青年団の連中が何人も言い寄ってきたもんじゃあ」

村人は、この話になると顔がかがやき、盛り上がるのですが……。

「しかし、祭りの再開となりゃあ、戦争で半分焼けた社の建て替えにやららん」

「神輿も焼けたし、鳥居も欲しいがね」

そして話の最後は、「費用は、どうすんぞね。金なんかありやせんぞ」となり、いつもそれから先に進まないのです。

そういった話の一方で、村の若いもんの間では、谷間の平地の再開発の話もありました。

「社と田んぼをいくつか潰して、土地を造成すりゃあ、村がにぎやかになるぞね」

「そうよ、商店街や病院も村に有ったらしいのう」

「映画館もいいのう。町のパチンコ屋、スマートボール屋もえらい、はやつとるそうなの」

そうして建設会社に勤める一人の青年が、簡単な図面と計画書を作って、青年団の間で話題になっていました。しかし「神社、社を潰したり、先祖代々の田んぼに手をつけ

ることは、ならん！」というお年寄り連中の意見で、これもまた話は進展しないのです。

この二つの話は、その後何年か、出ては消え、出ては消えするのですが、のちに大変な事件に発展するとは、だれも思いもしませんでした。

そんな話があることも知らない善門や子供たちは、今日も社の石段に座って、善門が何か喋るたびに大笑いをしていました。

善門がいくつかの小瓶を石段に並べているのです。

「この瓶の中にはな、オイの屁が入ってる。屁がな……、燃えるのよ。今までオイは屁道を楽しんでいたんじゃが、屁が燃えるちゆうことを最近、発見してな。屁をひりっぱなしにするのは、もつたいない。もつたいないことをするのは、天皇陛下に申し訳がたん。そこでな、この屁をいっぱい集めて燃やせば、炊事のたきぎ拾いをせんでよくなるんじゃあないかと、今、研究中じゃあ」

そう言って、一個の瓶の蓋を開け、善門が火をつけると、ポオツと一瞬、瓶の口の回りに青白い炎が燃え立ちました。善門は得意そうに子供たちを見回し言いました。

「みんなあ、屁を瓶に貯めてオイのところを持って来い」

「でも、どうやって大きな瓶に移しかえるのよう」

「そうじゃのう……、オイが竹筒で吸って大きな瓶には

きだすさ」

子供たちは大笑いです。

「善門さん、そーいやあ、さつき言った屁道ちゃあ何のこ
とぞね」

「おうおうさ、お茶を楽しみむのは茶道、花を生けて楽しむ
のは華道、そして屁を楽しむのが屁道さ。まず、いつでも
自在に屁を出せるようになったら屁道の初段だ。次にドレ
ミがだせりや二段、ドレミファソラシドがやれりや五段だ。
六段以上は屁で歌が唄えるのさ。最初はな、鏡でケツの穴
を見ながら、どこらへんがドで、どこらへんを開けたらソ
が出るか、色々と自分に合った開け方を研究するのよ。わ
しゃあ今、四段じゃ」

その時、若い女が一人、善門のところに来ました。

「子供たちが集まって、なんの話か知らんけど楽しそう
ね。これ、うちのかあさんから……」

女はオトキばあさんの一人娘の勝子で、いつものおにぎ
りを手にしていました。善門は、ずーっと頭を下げたまま
でした。

「かあさん、近頃時々寝込むんよ、年だしね。そんなに頭
下げなくてもいいのよ」

善門が顔を上げて、勝子と初めて目をあわせました。

勝子は、善門の澄み切ったその目を見て、思わず吸い込

まれそうな感じをおぼえました。そして次の瞬間、勝子は
自分のほほがぼつと熱くなるのがわかりました。あわてて
目をそらし、「うちも時々話を聞きに来てもいいかなあ」と
冗談めかせて言いました。善門は、「こんな屁の話なんか、
若い娘に聞かせられるわけないわね」と思いながら、少し
苦笑いをするだけでした。

その夜、ひろしは鏡にまたがり、じーっと覗き込んでい
ました。(ケツ穴ちゃ、うめぼしみたいじゃのう)と言いな
がら、力んで屁を出しました。一瞬、こう門の穴が開くの
が見えましたが、「なんじゃあ……、鏡がすぐ屁で曇って見
えんようになるがね」。

オトキ婆さんの娘の勝子

あの日から何日かたちました。オトキの娘の勝子は、初
めて会った時の善門の目を思い出していました。ポロポロ
姿にボウボウの髪に似つかない、奥深い目の色が忘れられ
ないでいるのです。村から日の丸に送られ勇ましく出征し
ていった兄の姿と、重なって見えたのかもしれない。

社の前の石段に、善門と勝子は並んで座って話をしてい
ました。

「うちねえ、勝子って言うんよ。勝ちちゃんって呼んで。